

昭和十四年度

関西・九州遠征の思い出

(久留さんの日記より) 羽馬輝久

昭和十四年と十五年に関西九州遠征を実施していますが、私の印象では十四年の方は見学、見物の合間に武者修業といった感じが強く、十五年の方はハードで、腕を磨くことを主眼としていたようです。

これは時の指導者篠間さんと田岡さんの性格の違いと、後者は秋に第一回全早慶戦をひかえた緊張感があつたためだと思います。故人の久留さんの詳細な日記が残されているのでそれを抜萃再録します。そして読み返しながら記憶を辿ることにいたします。

○八月二十四日

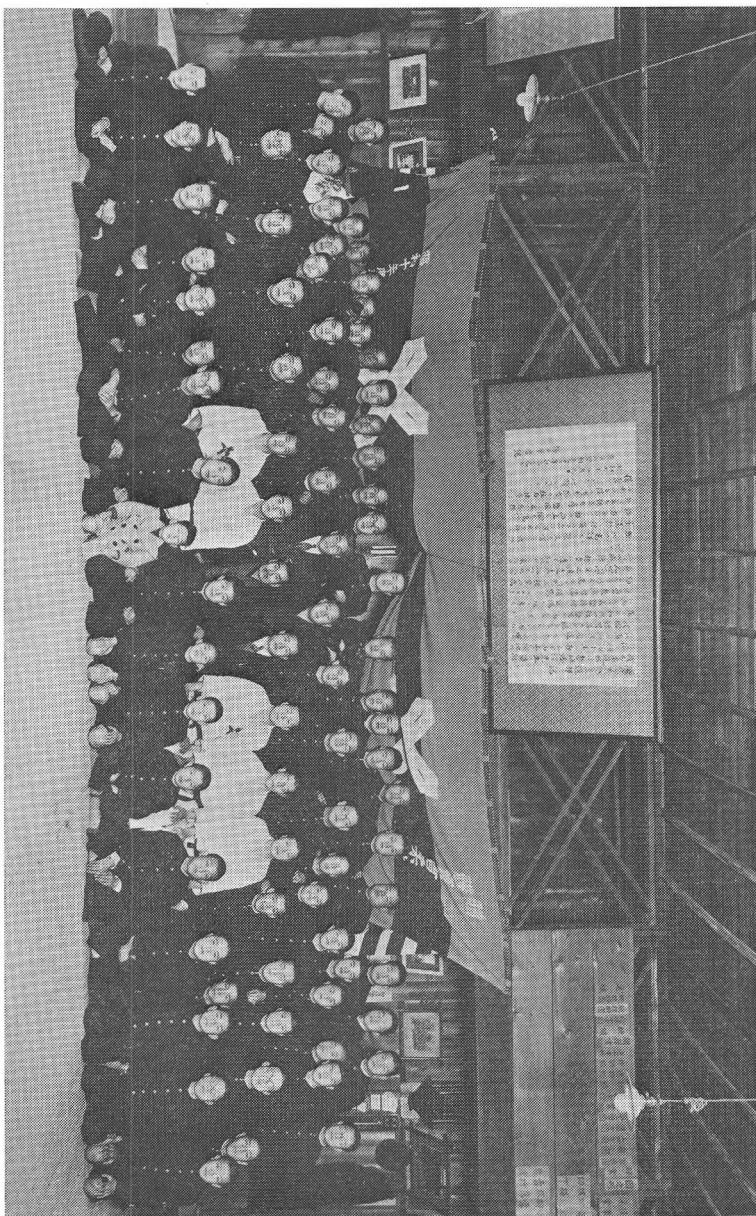
二三日前までは大分荒れて居た空模様も、今朝になつてすっかり鳴りをひそめて、碧空には悠然と白雲さえ浮んでいます。それは恰も吾々の遠征の前途を祝福するかの様だ。東から西から吾が戦友は遠征に備えての鍛えを語る顔も輝しく、大阪駅頭へと三々五々集まる。「ヨー、元気だったかい。」「ウン、えらく黒いな。」「実はちょっと泳いじました。」「あつこの野郎。」いとも懐しそうにいろいろの憶い出話が爆笑の中に消えてゆく。飯塚先生はじめ、中野先生、清水先生のお顔も見える。懐しい限りだ。予定の十時ともなれば全員集り、車を列ねて宿舎鐘紡に到る。箱田先輩がさも嬉しそうににこにこと吾々の面倒を見て下さる。午後自由行動。七時から鐘紡道場で鐘紡の方々と交換稽古。明

日の試合をひかえ軽く引き上げる。鐘紡特有の大きい蚊帳がやがて部屋を埋めてゆく。ワーッと突如として隣りの部屋で歎声があがる。何事だと思っているとYが困っているくせに嬉しそうに飛んで来る。「オーケイオイ、馬が入る様な穴が開いて居るんだよ。」「そりや何だ何だ。」「蚊帳にこんな大きい穴が開いて居るんだ。」Yの手真似がまた物凄い。それでも馬の穴とは傑作だ。和やかな夜は吾々をたのしい夢路へと誘う。大阪の夜も実に静かだ。

○八月二十五日

午前七時起床。眼が覚めても飛び起る者が無い。それもそのはず、五時に耳元でラウドスピーカーが大きい声で軍歌か何かを怒鳴る。一寸やそっとなら起されても起きない連中だがこれには参った。「エイ、こん畜生やめろ、やめろ。」と怒鳴りたいところだがそこは居候だ。シブシブ蒲団に頭を埋める。一寸寝たと思ったら七時の起床だ。寝起きの悪いこと夥しい。戦をまことに自由な中にも夫々英気を養う。畳碁をする者、将棋をさす者、悠々として試合の刻来るを待つ。午後二時愈々鐘糸道場に大阪警察軍と戦う時は来た。多年恨重なる大阪軍吾々一同心を合せ、正々堂々と闘う。死闘まさに二時間、藤川の見事な左内股に敵の大将を射とめ遂に凱歌は吾軍にあがつた。實に氣持よき勝利であった。飯塚先生はじめ中野、清水両先生の喜び如何ばかりであつたろう。まして関西の諸先輩は夜吾々のため歓迎会を堂ビル慶應俱楽部に開いて下さる。感謝のいたり、勝利に酔いつつ堂ビル屋上から大阪の市街を心地よい夕風を浴びつつ鳥瞰するのも亦實に気持ちよい。夏も忘るる涼風の中に先輩現役和氣靄々の中にすき焼をつつく。時節柄ビールも無かつたが實にたのしい集いであつた。ジョッキー、お茶の入ったのが来るとビールにかけては一騎当千のW「あーッ、きた、きた。」と子供の様に喜ぶ。お茶とわかつて悲歎する態を見ると、まことにいじらしき限りだ。午後九時すぎ散会、明日の船出と勝利の夢を結ぶ。

○八月二十六日



昭和十四年卒業生送別大会記念

午前工場見学、午後自由行動、飯塚先生ご不例のため帰京、夜七時別府航路に乗船。

○八月二十七日

眼覚めると頭が動搖する。ああ船に乗って居るのも忘れてぐっすり寝込んでいたらしい。船の夜明けも実にいいものだ。右に瀬戸の島々がまだ淡い眠りに落ちている。左に灯が見える。四国の灯であろう。船は音もなくすべつて行く。やがて九州の山々が見えて来た。ボートと汽笛が鳴る。由布岳、鶴見岳がその姿をだんだんはつきりと現して来る。丁度正午近くになると船は殆んど別府の港に入つた。静かに湯の都が横たわっている。空模様がだんだん悪くなつて雨さえ降つて来そうだ。別府三田会の人々が出迎えて呉れる。歩いて僅か五六分で豊前屋と言う旅館に到る。流石泉都だけに街を歩いても温泉臭い。空が愈々危しくなつて來た。旅館の風呂に先ず我先にと飛び込む。九州の地に足をとどめ、先ず福沢先生御誕生の地、中津を訪れんと午後一時三十三分別府発中津に向う。午後三時十七分中津着、始めての土地がこんなにも懐しいものであろうか。いや懐しさと言つよりも言うよりも言われぬ親しみと靈感さえ漂つて來るこの中津の街、途中道の左側にある和田先生の墓前に敬意を表する。やがて最後の角を左に折れると辺りが広々とした感じがして、一眼で御誕生の地に來たことが感ぜられる。莊厳な氣持と無限の親しみが一緒に吾々の五体をつつむ。先生の御家の戸、襖、畳、板の間の一枚一枚にも土間にもそしてありとあらゆるところに先生の生命がこもつてゐるのだ。あの土蔵の二階に先生は小さい時勉學せられたと言う。何んと言つて誇りのこもつた尊い土蔵だ。時には先生は御自分で土蔵の壁を塗られたと言う。この土蔵から大きい光がこの日本に放たれたと思うと吾々はじつと土蔵を凝視めた。何んという敬虔な壯嚴な氣持であろう。長崎から帰られてこの玄関で「お母様唯今！」と呼ばれたことだろう。その時は恐らく先生は草鞋を履いていらっしゃつたんだろう。想像はいろいろの想像を生んでゆく。そして数十年もの前のことが吾々には昨日のことの様に身近に感ぜられた。につとりと先生が

微笑んでいらっしゃる様にさえ思えた。記念帳に墨痕淋漓と「慶応義塾大学体育会柔道部九州遠征団一行中野正三師範以下二十一名」と書いた。先生の土蔵の土を失敬する者もあつた。心に深く期するところあつての神聖な失敬だ。人々よ咎めること勿れ。小幡記念図書館にいたり暫く休憩、晚餐を御馳走になり午後六時四十一分中津発先輩の歓迎を忝うし午後八時四十六分別府着で帰る。一風呂浴びて浴衣に着換え夜の別府の街を散策す。中津への訪れはきっと吾々の大きい土産であり教訓であろう。

○八月二十八日 午前地獄見物、午後宮崎へ向い、宮崎泊。

○八月二十九日

七時半、起床。九時バスにて青島に向う。仲々美しい如何にも南国娘らしいバスガールが音吐朗々と、「何と申しましても日本の國のそもそもその始めで御座いますから一木一草悉くに神代の香りが漂つて居ります。官幣大社宮崎神宮、鶴戸神宮を始め、小戸の阿波岐ヶ原、天の岩戸、高千穂の峰、西都原の古蹟等由緒尊い神社や古蹟が至ることござります。……古い日向は亦最も新しい國で御座います。そんなことはそつちのけにして「彼奴はシャンだ。」など言うのは誰だ!!官幣大社宮崎神宮に御詣りする。今日も風雨が荒れてゐる。稻も大部分実つて風に揺いでいる。

田畠の中を前世紀の遺物の様な玩具の様な汽車も吾々の旅情をそそる。いよいよ青島だ。ビロー樹の茂る岸辺、奇岩また奇岩、彦火火出見命と御后豊玉姫の美しき物語を秘めるこの青島、東に太平洋の怒濤は逆巻き熱帯の林は嵐に嘯いてゐる。午後二時から武徳殿で警察軍と試合。見事吾々の勝利となる。夜公会堂で先輩の晚餐会の招待を受け午後七時三十八分、昨日の同じ汽車で宮崎に別れを告げる。十時二分霧島着。折から風雨は拭つた様に美しい月夜となつた。霧島館のバスに迎えられ、中腹七六〇米の高所へバスは月光に映える渓谷美しい山の尾根を昇る。

○八月三十日 午前見物、午後鹿児島へ、同地泊。

○八月三十一日 桜島見物。

○九月一日 午後交歓稽古、熊本へ、同地泊。

○九月二日

午前七時半起床。先輩八時宿に来て下され、一同打揃い新聞社の写真班の前に立ち、そして先ず西南役と加藤清正で名高き熊本城に向う。西南の役に当時の建物は大部灰燼に帰し、今僅かに二の丸宇土櫓がありし日の面影をとどめるもあわれである。谷干城籠城五十有余日その死守を偲びそぞろ別れを惜しみ、天下の名園水前寺に到る。

その林泉の美、風致の妙を兼ね備えた純日本式庭園である。中にも藩公遊休の「御茶屋」成趣園の雅味と言い、寂びと言い、実に日本美の再発見と言うべく恍惚と見とれる。午後二時武徳殿にて有志の方々と交換稽古。吾々も負けのものかと元気一杯、流汗物凄い。西瓜の味は格別だ。一風呂浴びて「味銀丁」にて三田会主催の歓迎の席に臨む。支那料理で仲々うまい。赤塚と藤川と渡辺が大酒を大杯で浴び万場の喝采もまた愛矯であった。午後八時四十五分の汽車で元気一杯大牟田へ乗り込む。明日は試合のこととてゆっくり旅館に睡眠をとる。

○九月三日

今日は大事な試合とて思う存分睡眠をとる。先輩の訪れは旅路にあつて嬉しいものだ。市中に吾が塾と全三池軍の今日の試合のポスターが大きく宣伝されている。勝算既に吾が掌中にあるとは言え、油断は大敵悠々と午後一時敵地に乗り込む。熱戦また熱戦、吾が三将羽鳥、敵の副将大将の首級にとどめを刺し見事凱歌は吾が塾軍に高らかに奏せられる。實に見事な勝利であった。試合後武徳会支部の招宴あり、夜、浜の三井クラブにて先輩の方々の御馳走の席に臨む。九時すぎ三々伍宿に返る。しばらくして、腹痛を訴える者続出、數十分の中、元気旺盛の若者殆んど腹痛に倒る。夜中電話は静かな大牟田の街々に乱れ飛び、医師は真夜中の宿の戸を叩き平和な吾が遠征軍騒然として無気味

な一夜を過した。腹痛には流石の猛者も参つたらしい。だけど藤川、赤塚、羽鳥、渡辺の諸兄常に変り無く平然としている。どこまで彼等は不死身か。しかし容態は漸次良好に向うは不幸中の幸であった。

○九月四日

昨夜から今朝にかけて中毒者も一時はどうなることかと狼狽したが、だんだん憂色も薄まり快方に向い一同安堵の胸をなで下した。今日は久留米に行き試合の予定であったが、此の分だと到底試合はおろか練習さえ無理だ。遂に涙を呑んで久留米ゆきを断念、専ら静養に決意し、代表として中野先生はじめ桑原、和田、藤川、羽鳥の諸兄久留米に悲壮の中に発つ。交歓稽古の後、招宴、久留米泊。

○九月五日 午後福岡へ、夜新三浦で招宴、東邦電力クラブ泊。

○九月六日 玉屋で田中丸先輩の招宴、午後太宰府見物、夜吳へ向う。

○九月七日 吳着、江田島兵学校で稽古。吳泊。

○九月八日

五時頃だつたろうか、物凄い喇叭の響きと軍靴の響きが一緒になつて吾々のたのしい夢路を破る。軍港はラッパに暮れ、ラッパに明けゆくのだ。

海國日本、たのもしき限りだ。だけどそれも夢の様にまた夢路を辿る。七時半起床。

先輩に案内されて九時潜水学校ランチに便乗潜水学校を訪れ、いろいろと潜水艦の知識を与えられる。彼の有名な佐久間艇長の偉勲を物語る潜水艦も今や護り神として陸に鎮座し、ありし日を憶い涙五体に溢るるを覚ゆ。昼食を御馳走になつて呉に帰る。吾々海軍の方々の労苦を思い感慨深きものがあつた。呉に帰りて午後二時愈々試合だ。集会所の二階の道場に到れば既に満員、海兵団長閣下も御見えになり、試合開始せらるるや力闘、また熱戦、そして五分

五分遂に惜しくも吾が大将藤川有利であつたが敵大将と引分けられ、遂に引分け。無念涙を呑む。

夜三田会の招宴は遠征最後の解散会を兼ねて盛大に挙行せられる。考えると一週間に亘る垂ん垂んとする昭和十四年度夏の柔道部関西九州遠征も幾多の憶い出を孕んでここに見事花咲き実を結んだのだ。中野先生から御懇篤なる御教えをたまわり、柔道部万歳を三唱し、この吳にて遠征有終の美を飾り、ある者は郷里へ或者は東京へ夫々散つて行った。それにも病んで途中不幸にして御帰京遊ばされた飯塚先生の御容態は如何であろうか。僅か数人の人々が足に腕に負傷したのは氣の毒であつたが元気一杯再会を期して別れる吾々若人の胸中や如何に。各地先輩の皆様の御親切な御指導は唯々感謝感激の至りである。（以上久留日記より）

私は一週間程前から鐘紡淀川工場に先行して、昼は市内見物、工場見学など、夜は工職員四、五十名の方々と稽古をして過しております。

久留さんの日記に出て来る蚊帳は壯觀でした。室内の長押ナガツへ送電線程もある針金が四本程張り渡してあつて大きな蚊帳が吊つたまま片側に押しつけてあるわけです。一人一人で寝る時は室の隅に布団を敷いて蚊帳を少しだけ引き出してその中に入ればいいわけです。全員が泊つた時には室一杯に引き出したのでふだん気がつかなかつた大穴が出来たものと思われます。

二十七日夕刻中津の福沢邸に向つている時、赤とんぼが体や顔にぶつかつて歩きにくい程だったことが眼に浮かびます。赤塚君や藤川君の広い胸に赤とんぼがかすり模様を書いておりました。

宮崎の試合は点取りでした。先鋒の山崎君が勝つた相手の戸高氏（現八段）は後に拓大を出て専門家になり全日本

選手権、東西対抗などで活躍した軽妙な業師です。おそらく山崎君に軽妙負けしたのだろうと思います。試合後の交歓稽古の時國士館の上級生で元氣盛りの細川九州男五段（現八段）がおられ真っ先に一本お願いしたのですが、いきなりかけた釣込腰がまぐれでかかつてしまい、そのあとは数本投げられた挙句抑え込まれて散々な目に合いましたが、それが大いに自信をつける動機になつたことが思い出されます。鹿児島での交歓稽古の相手の中に、この年鹿商を出て武專に進んだ吉松君（現八段）がおりました。

熊本では百人余を相手に一時間半位の稽古だったので皆体中の水分がなくなつてしまい道場裏手で食べた熊本名産の水瓜が素適にうまかったものです。

久留日記にもある通り、熊本での宴会は大牟田へ向うため時間に制約があつたせいでピッヂがあがり中華料理のスープの大鉢に酒を満して飲んだ者が数名あり、汽車にのせるのに、また大牟田でおろすのに随分苦労したものです。

翌日の大牟田での試合は赤塚、藤川両君が二日酔のため私が前に出て抜き切る作戦が運良くねらい通りになりました。試合後ご馳走になつたつまみの蒲鉾が変質していたらしく二日酔で殆んど食べなかつた人と、食べても平気だった清水先生外一人を除いて、全員猛烈な食中毒になりました。宿のご不淨の数が足りず、待ち切れないため廊下や階段が足の踏み場もない物凄い様相を呈しました。

私は下痢をしなかつたばかりに試合を予定した久留米へお詫に先行し、僅か三人で百人余の人と交歓稽古となりたつぶりしぼられました。夜隈丸君の生家である豪華な料亭でご馳走になつたのですが、中毒事件が新聞に出たらしく我々の處へ芸子さんが持つてくるとつくりには、昆布茶が入つていました。

○ 小諸松 松
 沢橋尾 尾 尾 田 紅
 幸三郎 勉 藍之輔 実
 足引引 大 外 不詳
 扱 分 分 剣 剣 詳
 ○ 室高吉 三吉 吉
 伏橋田 浦田 田 白
 健善天 幸
 人資浩彦 助
 先鋒 ○

紅白勝負

卒業生送別試合

二月十一日 於 綱町道場

幹事 部長役

石三桑田 笹清中飯橋員
 渡井原岡 間水野塚本
 顯文猶正正國
 一雄正協興一三郎孝

○ ○ 秋秋井松 奥奥井井 内猪猪 小福浜浜 円円 高峰金小
 五十嵐元元上村田田 関関海原原林田野野 谷谷橋岸子沢
 正栄豊泰直 敏恒重憲 英和仙卓
 夫 郎明二道 仁勝 雄太雄 夫康三治

不不不不引不不大釣合引引 扱足押不扱大絞扱不
詳詳詳詳分詳詳外達腰技分分 腰扱込詳腰返技腰腰詳

○内内鈴太弘太 滿満荒吉大木木木森森 上上上上上
 田海海木田田谷谷木川山島島島井井 条条条条条
 勝昭康三四俊宗清 光
 男勝吉四郎 吉久一勇 博武 猛

		卒業生掛勝負。													
四段	小西和夫		副将	羽	○	羽	○	渡	○	峰	○	守	石	笠	○
				近藤	桑	原	原	岸	岸	谷	橋	川	原	笠	
				鳥	鳥	原	会	會	會	藏	雄	一	禧	慶太郎	
				輝	卓	豊	一								
				久	正	藏	雄	郎							
○ ○ ○ ○ ○															
大將	先鋒		不引戦	不分詳	大外卷	背負投	足払	払込達	合技	小内刈	足払	分	引腰	跳	不詳
守	大笠	内井	大將	副將	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
谷	沢	原海	鳥始	始	藤	藤	藤	木	木	和	山	山	高		
一	達	慶太郎	海良	良	川川	川川	川下	下下	間	田	崎	田			
達	慶太郎	豊明	又六郎	源治		常男		三八郎	猶興	三八郎	德藏				

二段	峰岸豊雄	三段	菅井良助	三段	水之江公英	四段	近藤漸
○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○	
大將	先鋒	大將	先鋒	大將	先鋒	大將	先鋒
笠鈴秋松志保原木元村沢		石内秋鈴井		笠内蒲生元		守安高田	笠大沢
原木元村沢		橋海元木上		原海木康		谷田原	原
慶太郎康榮泰保吉	三郎	正昭榮三郎	記勝	慶太郎吉	明	一義勝	達慶太郎
	吉					也	夫

二月十一日進級せし者。

乙組へ 松尾藍之輔

丙組へ 角田実、三浦元彦、吉田幸助

二級へ 木島博、小林重太、内海敏勝、井関仁、吉川清

一、荒木宗久、猪原恒雄、満谷俊吉

寒稽古出席者（記事は出席者名のみ）

先輩出席者 阿部秀助、阿部英児、相羽良次郎、秋山正、
岩崎三郎、峰岸鎮治、飯塚茂、阿部大六、五島勇雄、五島
三雄、以上十名。

精勤証 羽島輝久、守谷一郎、乙川正一、上野貞晴、白川
達一、以上五名。

皆勤証 羽鳥輝久、守谷一郎、笛間猶興、石渡顯一、峰岸
豊雄、笠原慶太郎、湯池貞俊、兒玉一男、横井肇、石川禱
夫、成宮誠一、山崎高、石渡英二、田中常司、横田実、
松本善次郎、井上豊明、荒木茂、松村泰二、志保沢忠世、
高木慶三郎、太田三四郎、荒木宗久、山本倩、猪原恒雄、
塩山豊、内海敏勝、満谷俊吉、福田憲雄、高木文雄、大山
勇、吉川清一、峰岸仙三、塩山保二、清水達猪、池見吉彦、
奥井洋一、小倉保雄、山口頸、有島重武、北川英一、上野
貞天、太田五郎、稻川昌吉、乙川正一、白川達一、望月和
夫、上野貞晴、藤本信一郎、柏谷保英、松尾藍之輔、角田

実、飯塚一陽、以上五十三名。

進級月次試合

無級→甲組の部

○日下桂次

四級の部

○ 水	8	7	6	5	4	3	2	1	○ 池	7	6	5	4	3	2	1	○ 日	
永	高峰	高峰	高橋	池貝	高橋	清水	清水	達	松尾	福山	角田	吉田	幸	澤子	下桂	次	○ 下桂	
井	橋	岸	橋	貝	橋	道	達	藍之輔	元	元	一	実	彦	次	桂	次	○ 桂次	
剛	善	仙	道	道	達	猪	猪											
資	三	康	孝	尚	猪													

引 分
引 分
引 分
引 分
引 分
引 分
引 分
合 技
合 技
合 技
合 技
合 技
合 技
合 技
合 技

大外刈

引 分
引 分
引 分
引 分
引 分
引 分
引 分
返 分
返 分
返 分
返 分
返 分
返 分
返 分
返 分

○ 塩	円 永	高峰	高橋	諸橋	池貝	高橋	○ 高	○ 松	○ 福	○ 高	○ 角	○ 吉	○ 滝	○ 後	○ 藤	
山谷	井	岸	橋	橋	道	善	倉	山	山	田	田	田	澤子	藤	戒	
保和	剛	善	仙	道	尚	資	勇	元	元	一	一	一	彦	二	二	
夫	資	三	康	孝	尚	資	夫	剛	資	三	康	康	助	二	二	二

四月二十一日

三級の部

二級の部

四級へ	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
滝沢子彦、後藤戒三、日下桂次	太	太	猪	満	内	井	吉	小	村	浜
四月二十一日進級者。	田	田	原	谷	谷	海	閔	閔	松	野
	三	恒		俊	敏	清	重	健	英	光
	四	郎	雄	吉	勝	仁	一	吉	太	武
	引	製	婆	大	外	引	体	合	上	合
	分	固	固	外	刈	分	落	技	西	技

森	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
村	浜	森	浜	山	塩	井	井	井	井	井
松	野	野	本	山	山	井	井	井	井	井
健	英	太	郎	壽	豊					
吉	太	郎	壽	豊						
込	引	體	製	婆	固	大	外	刈	引	引
腰	分	落	固	固	固	分	落	落	分	分

高	奥	○	○	○	○	○	○	○	○	○
木	田	太	猪	木	木	内	荒	井	吉	
木	田	田	原	島	谷	海	木	閔	川	
慶	真	三	恒	俊	敏	宗	清			
慶	三	道	四	郎	雄	博	吉	勝	久	仁

内	吉	木	山	福	笠	高	高	室	清	三	坂	角	紅
海	川	川	島	本	田	原	橋	橋	伏	水	門	門	門
敏													
勝													
引	払	足	合	大	内	引	引	引	引	足	引	内	大
分	腰	払	技	返	分	分	分	分	分	払	分	股	外刈

新入部員歓迎紅白試合

三級へ 塩山保一
二級へ 山本 優
一級へ 大山 勇
太田三四郎

四月三十日(日)

白

先鋒 ○ 吉
○ 吉

○	大	浜	○	浜	○	○	○	○	高	高	松	吉	吉
大	浜	野	野	野	野	野	野	野	峰	池	高	吉	
山	山	野	野	野	野	山	岸	貝	橋	倉	倉	田	田
山	山	野	野	野	野	野	野	仙	善	勇	藍	幸	助
勇								太	太	之	輔		

○○○佐佐成高高兒西上上江江杉福由滝園田秋大井井太奧猪
 藤藤宮田田玉原洲本岳比沢田中元島上上田田原原
 誠勝一正智泰直貞常榮仁豊三四直恒
 清一男男典秀吉人彦康司郎夫明郎道雄

扱上引引内引上十字横払背引合跳引引足引引背
 腰四方分分股分四方逆腰投分技腰分分分払分分
 燕負投返

○○○横安小袋檜沢沢石石横横横中山志保平田満荒小
 井東野生崎井井渡渡渡田田田塚内沢辺谷木木林
 敬信正英英忠弥俊宗重
 肇三一彦夫二実旦世郎吉久太

大副將

侯藤桑渡渡和久飯石石石笠笠笠佐
 野川原会会田留田渡渡橋橋橋原原原藤
 常卓徳泰顯正慶
 清男正藏彰司一記太郎

不引引足合足引引固内逆小内払綫足送
 戰分分払技払分分技股刈四方払綫
 上四方

大副將

○赤羽羽笛笛三山山渡渡笛安安大坂
 塚鳥鳥間間井岡岡辺辺川田田沢本本
 輝猶文三昌俊義達英
 豊久典雄郎一夫也夫男

同軍段位を合わせて十七名（三段三
二段二〇）
段四）で対戦、前半農大優勢に四人を勝ち抜いたが
半成宮二段、安田三段活躍して、大将戦に持ち込み
将渡会三段は農の大将草田三段を倒して勝つ。

大後初

本塾予科対農大对抗試合

五月十三日 於
綱町道場

紅白勝負の結果進級せし者左の如し。

四級へ編入 高倉勇次
笠原武次郎
二級へ 浜野英太郎
編入 田辺

二級

浜野英太郎

編入
田辺

成年組無級の部												進級月次試合											
四級の部						1花谷						幸三郎						五月十八日(木)					
11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	○鏡	4	3	2	○日	1	花谷	大将	○渡会	大将	○渡会	大将	○渡会
小峰	高	石	池	清	笠	鏡	鏡	鏡	○松	日	尾	下	下	桂	幸	三郎	卓	藏(3)	卓	藏(3)	卓	藏(3)	
沢岸	岸	橋	田	貝	水	原	山	山	尾	桂	次	桂	次	桂	次	桂	次	桂	次	桂	次	桂	次
幸三郎	仙	道	満	達	武治郎	望	男	大外刈	足	足	合	大外返	足	足	合	大外刈	足	足	合	大外返	足	足	合
大外刈	合	引	引	引	引	体	大外返	大外返	○松	角	日	大外返	足	足	合	大外刈	足	足	合	大外返	足	足	合
和幸三郎	保	仙	道	満	達	武治郎	善	哲	川内正充	角	田	桂	桂	桂	桂	和幸三郎	草田	草田	草田	和幸三郎	草田	草田	草田
男	雄	三	尚	男	孝	猪	資	夫	○松	尾	下	桂	次	桂	次	和幸三郎	草田	草田	草田	和幸三郎	草田	草田	草田

1	塩	田	山	保
2	○福	田	山	保
3	福	田	憲	二
4	○上	条	健	吉
5	上	田	猛	大外刈
6	○村	英	合	技
7	木島	太郎	引	腰
8	木島	英太郎	分	引
9	木島	龍太郎	合	技
10	木島	博	足	払
11	木島	足	合	技
12	木島	足	足	払
13	木島	足	内	合
14	木島	足	分	股
15	木島	足	引	腰
16	木島	足	引	腰
17	木島	足	分	腰
18	木島	足	引	腰

○	塩	田	山	保
○	福	田	憲	二
○	塩	条	健	吉
○	福	山	光	武
○	塩	山	保	二
○	田	井	健	吉
○	森	山	英	勇
○	浜	野	恒	大
○	木	山	重	外
○	小	原	太	刈
○	木	島	博	技
○	猪	林	雄	腰
○	大	原	太	打
○	木	島	重	腰
○	高	田	久	打

1	田	辺	足	合
2	○浜	英	足	合
3	浜	太郎	合	技
4	○木	英	払	技
5	○木	太郎	足	払
6	木島	英	足	内
7	荒木	太郎	足	合
8	奥田	英	足	足
9	田直	太郎	足	内
10	道久	英	足	合
11	跳腰	太郎	足	股
12	引分	英	足	技
13	分引	太郎	足	払
14	内股	英	足	技
15	引	太郎	足	打
16	腰引	英	足	腰
17	引分	太郎	足	打
18	内股	英	足	腰
19	股引	太郎	足	打
20	技	英	足	腰
21	払技	太郎	足	打
22	打技	英	足	腰
23	腰打	太郎	足	打
24	打腰	英	足	腰
25	腰打	太郎	足	打

右の結果進級せし者左の如し。
乙組
日下桂次

1	田	辺	足	合
2	○浜	英	足	合
3	浜	太郎	足	内
4	○木	英	足	合
5	○木	太郎	足	足
6	木島	英	足	内
7	荒木	太郎	足	合
8	奥田	英	足	足
9	田直	英	足	内
10	道久	英	足	合
11	跳腰	英	足	足
12	引分	英	足	内
13	分引	英	足	合
14	内股	英	足	足
15	引	英	足	内
16	腰引	英	足	合
17	引分	英	足	足
18	内股	英	足	内
19	股引	英	足	合
20	技	英	足	足
21	払技	英	足	内
22	打技	英	足	合
23	腰打	英	足	足
24	打腰	英	足	内
25	腰打	英	足	合

春季合宿

五月二十一日より六月三日まで

於　日吉体育会ルーム

部報第一号より抄載すれば「元氣濱刺たる新入部員を迎へ、部員相互の親睦を益々緊密にするため、緑したたる日吉の丘に部員一同五十七名、和氣藪々の裡に合宿に入る。」

昭和九年に予科が日吉に移り、翌十年日吉マムシ谷に、道場が開かれてから、漸く柔道部も二重生活的環境に置かれる様になつたので、日常の行事や稽古にも、亦精神的統一を計る上にも、今までと異った考慮が必要となつた。ここに誌された春季合宿もその一つの手段として、当時の幹事諸君の企画したものである。

「三田と日吉の統一」

一級へ　奥田直道、高木慶三郎

早朝六時、冷水に身を清め、太陽を仰いで名アナ渡会君の号令一下整然とラジオ体操に合宿の朝は明ける。朝食後ある者は学校へ、ある者はテニス等に興じつ午後至れば、三時半全員気持よき道場に集り熱汗淋漓の猛

甲組
松尾藍之輔

四級へ　古川 浩、有田 裕、奥井津一、藤原 健、梶哲三級へ　小沢幸三郎、池貝 孝、峯岸仙三、円谷和夫

二級へ　上条 猛

稽古二時間、風呂に汗を流して合宿に帰れば六時半の夕食が待ち遠しい。一同食堂の飯に満腹する頃、三々五々散策に又談笑に愉快なひと時が過ぎ、合宿の夜は感激の内に更けてゆく、かくて六月三日、あたかも早慶戦（野球）勝利と重なり、解散会のビールも一入、二週間の有意義な合宿に多大の成果を残して解散した。」

当時普通部から予科に入学した石渡英二君は前記部報に「合宿感想」と題し新入生として参加した体験が誌されて居る。

「結論を先に持つて来れば、昭和十四年度春季合宿は二週間の生活の中で、重要な意義を含み、僕自身にも少からぬ影響を与えて呉れたわけであります、本科の方々とは三田で接していましたが、日吉の方々及びこれから六年間共同して頑張るべき諸君には殆んど面識がなかつたと言つてよい位でしたのです。この合宿は殆んど未知である同級生をして本当に兄弟分仲間という感情を互に持たせてくれたのです。毎日行動を共にする僅かな二週間の合宿がこれ程効果的であることを初めて知り、又先輩諸兄をよく知つて、柔道部に籍を置くことを、つくづく嬉しく思いました。それから稽古を一生懸命にやることは修養にもなり、所謂ファイトの何であるかを知り得

ると云う事を教えられたのであります。」と如何にも新入部員らしい感想を述べている。

新入部員宣誓式

体育会主催

六月十三日三田大ホールに於て、体育会創設以来初めての行事として、新入部員宣誓式が行われた。体育会各部選手全員と新入部員約二〇〇名が集合、小泉塾長、浅井体育会理事の訓話があり、昭和十四年度体育会新入部員を代表して柔道部安東敬三が宣誓し、式後二十三番教室にて茶話会を行つた。

宣誓文

今般吾等、慶應義塾体育会ニ籍ヲ置クニ至リタルハ無上ノ光榮トスル所ナリ

此ノ上ハ礼儀ヲ守リ、規律ニ従イ、品行ヲ正シクシ一意專心斯道ニ励ミ以テ義塾体育会ノ為メ最善ノ努力ヲ尽サソコトヲ誓ウ

右宣誓ス

昭和十四年六月十三日

慶應義塾体育会新入部員總代

安 東 敬 三

進級月次試合

													成年組無級の部				
													四級の部	六	五	四	三
13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	○	龍	○	龍	○
三高	小田	梶	鏡	島	古	奥	笠	有	有	有			一ノ瀬	野	野	野	野
門橋	倉口	山	川	井	原	田	田						村				
哲善保		望恵	律	武									請		醇	栄	
夫資雄	弘哲	男一	浩二	郎									裕	弘		一郎	三

引引合引引払引引体合足釣引
分分技分分腰分分落技払腰分

合引内優大足
技分股勢刈払

○	高	三	高	小	田	梶	鏡	島	古	奥	笠	浅	古	○	松	一	花	角	司	龍
橋	門	橋	倉	口	山	川	井	原	羽	川					尾	一ノ瀬	谷	田	城	野
哲善保		望恵	律	武											藍	請健	毅	醇		
康夫	資雄	弘哲	男一	浩二	郎	一	浩								輔	弘二	実	一	三	

六月十六日(金)

													二級の部			三級の部					
													6	5	4	3	2	1	16	15	14
丙組へ	進級せし者左の如し。	7	○	6	5	4	3	2	1	○	森	塩	村	福	小	小			石	諸	高
二級へ		満	大	内	荒	猪	山	山			井	山	松	田	沢	沢			田	橋	
村松健吉	野村栄一郎	谷	山	海	木	原	本	本			光	保	健	憲	幸	三郎			満		
		俊	敏	宗	恒						武	二	吉	雄					男	勉	康

一大外刈	一小外刈	合	引	合	大内返	一大外刈	体	引	引	引	引	引	引	横四方	内股	
乙組へ		技	分	技			落	分	分	分	分	分	分			
満谷俊吉	竜野醇三	井	○	○	○	○	○	池	森	塩	村	福	円	○	○	
		満	大	内	荒	猪	小	貝	井	山	松	田	谷	石	諸	
		関	谷	山	海	木	原	林						橋	田	橋
		俊	敏	宗	恒	重		光	保	健	憲	和		道	満	
		仁	吉	勇	勝	久	雄	太	孝	武	二	吉	雄	尚	男	勉

活殺法研究会

六月十六日午後七時より綱町道場に於て、飯塚、中野両師範の御指導に依り行う。始めに桑原幹事より活法及検死法の説明あり。次いで両師範より當て身等の御教示あつて後、逐次活殺法を体験的に研究し、茶話会の後一時解散した。本日は初参加者二十三名といつもより多数のため非常に時間を費すこととなつた。

関西・九州遠征

八月二十四日から九月四日まで

本塾対大阪警察軍

八月二十五日 於 鐘紡道場

先鋒○安田義也(3)

本塾

守石久渡石横安
谷橋留辺辺橋井田
一正昌正
郎記彰一記肇(3)
引引引引
分分分分高高高長石小吉○吉馬
木木木谷川柳原原(3)
先鋒 大阪警察軍

渡安横高成山山	本	先鋒○藤羽赤赤赤鳥篠桑和石
辺田井木宮崎崎		川鳥塚塚塚塚海間猶又六郎(3)豊(4)
昌義忠誠	塾	常輝男久(4)
一也肇祐一高(2)		引分
引引引引引引		左内股
分分分分分分		大将副將
	1	大将副將
石阿橋高吉森戸	於	保豊奥信石瀬瀬瀬尾(4)
沢南本橋本下高(2)		坂田(5)田(4)村(4)田(4)原(4)
		大田西中

宮崎武徳殿

本 勢 対 全 三 池 軍

久 石 石 渡 安 石 橫 橫 橫 成 山 崎	先鋒 ○ 山	大 將 ○ 和 石
留 渡 渡 辺 田 橋 井 井 宮 崎		副 將 ○ 桑 和 留 渡
顯 昌 義 正 謹	本 勢	大 將 笹 原 田 田 德
彰 一 一 也 記 肇 一 高		副 將 猶 正 藏 彰 一
引 分 引 分 引 分 引 分	九月三日 於 大 車 田 武 德 會	不 戰 引 分
岩 岩 西 熊 西 西 境 志 小 境 野 奥 石 全 三 池 軍		大 將 ○ 館 山 石 山
橋 橋 山 谷 村 村 水 田 橋 野 田 橋		副 將 山 山 元 川 下
(4) (3) (3) (3) (3)		(3) (3) (3) (3) (3)

本 勢 対 海 軍 吳 鎮 守 府 軍

○ 石 渡 ○ 安 安 石 橫 成 山 崎	先鋒	大 將 ○ 羽 笹 桑 和 守
渡 辺 田 田 橋 井 宮 崎	本 勢	副 將 藤 赤 羽 間 原 田 谷
顯 昌 義 正 謹		川 境 鳥 鳥 原 原 田 谷
彰 一 一 也 記 肇 一 高	8	常 常 輝 猶 德 一
(3) (3) (3) (3) (3) (2) (2)		男 豊 久 興 正 藏 郎
引 分 引 分 引 分	九月八日	(4) (4) (4) (3) (3) (3)
		不 不 戰 引 分
福 福 伊 伊 吉 吉 山 吉 門 吳 鎮	先鋒 8	大 將 堀 時 作 若 津 津 児
部 部 藤 藤 岡 岡 本 田 脇 軍		副 將 (5) 吉 山 田 島 島 (4)
		(4) (4) (4) (4) (4) (4)

四級の部		無級の部		副將	進級月次試合							
1	3 2 1	藤○	赤羽○		羽笛○	桑○	和○	守○	久○	石○		
有	龍日坂	川	川	大將○	塚鳥	間原	原田	田谷	留渡	渡		
田	野下本	醇桂弘			鳥	原	原田	田谷	留渡	渡		
					間	原	田	谷	留	渡		
祐	三次喜				常輝猶				德一			
						男豊	久興	正	藏郎	彰		
						(4)	(4)	(3)	(3)	(3)		
引	引足				引	引			引			
分	分払				分	分			分			
				副將								
○ 奥	松龍日				羽進	天山渡	○○	○○	高高	西行	行	行林
井	尾野下				原藤	野梨辺	渡	渡	高高	本	本	本
津	藍醇桂				津	辺	林	林				
二	輔三次											

二級の部		三級の部							
6	5 4 3 2 1	6	5 4 3 2 1	10	9 ○	8 ○	7	6	5 4 3 2 ○
○ 浜	猪大上荒山	塩森池円小峰	高高高	笠鏡石田	奥				
野	原山条木本	山井貝谷沢岸	橋橋橋	原山田	口井	井			
英	恒宗	保光和幸仙		善武治	望満直	津			
太	郎雄勇猛久傳	二武孝夫郎三		資郎	男男弘	二			

足	足	体	大	足	引	引	引	体	引	大	払	大	外	引	引	大	外	引	合
足	足	体	大	足	引	引	引	体	引	大	払	大	外	卷	腰	大	外	引	技

○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
木	浜	猪	大	上	荒	神	塩	森	池	円	小	高	高	小	笠	鏡	石	田	清
島	野	原	山	条	木	田	山	井	貝	谷	沢	橋	橋	倉	橋	原	山	田	水
英	恒	宗	憲	保	光	和	幸	三	郎			道	保	善	武	望	満	直	達
太	郎	雄	勇	猛	久	雄	二	武	孝	夫	郎	康	尚	雄	資	郎	男	男	弘

							無級の部	進級月次試合	
三級の部	5 4 3 2 1 ○	四級の部	2 1 ○	乙組の部	2 1 ○	丙組の部	3 ○ 2 1	神 柴 神	7 浜野英太郎
峰	田 小 藤 北 北		日 野	高 高					
岸	口 倉 原 川 川		下 村	木 木		木	田		
仙	直 保 英		桂 栄	正 弘		正 弘	久 夫	勝之助	
三	弘 雄 健 一		次 郎		弘				
引 分	引 分 外 刈	引 分 腰	扒 腰	引 分	体 落	押 込	押 込	合 技	引 分
									崩上四方
								十月十三日(金)	
高橋善資	三 田 小 藤 有 ○		龍 日 ○	野 尾 ○	神 高 柴			○ 内 海 敏 勝	
門口	口 倉 原 田		野 下	村 本	田 木				
哲直	保		醇 桂	栄 一 郎	勝之助	弘 夫			
夫	弘 雄 健 祐		三 次						

							二級の部		
一級へ	二級へ	三級へ	四級へ	丙組へ編入	乙組へ編入	進級せし者左の如し。	6 5 4 ○ 3 2 1	8 7 6 5 ○ 4 3 2	
荒木宗久	福田憲雄	竜野醇三	高木正弘	福田勝之助	柴 久夫		荒 山 上 上 上 上 荒 山 上	森 池 神 高 峰 岸	
							条 条 条 木 本 条 宗	岡 田 貝 田 岩 橋 田 岩 橋	
							猛 久 儒 猛	賢 一 郎 孝 尚 康 三	
							引 合 扒 足 引 引	引 引 崩 上 引 内	
							分 技 腰 扒 分 分	分 分 四 方 分 分	
							木 猪 大 上 荒 山 ○	塩 森 池 塩 神 高 橋	
							島 原 山 条 木 本	山 岡 貝 山 田 岩 橋	
							恒 宗	保 賢 一 郎 孝 豊 雄	
							博 雄 勇 猛 久 儒	尚 康	

本塾対日本体操学校対抗試合

十月二十四日

於 綱町道場
日本体操学校(2)先鋒 本塾
安横坂大山笠下野川成滝樹矢依磯高田田井井本沢沢崎崎原宮宮宮井嶋光辺田
義英達慶國誠貞富士彌正晃勝平男
也肇男夫高郎男一彦正送襟絞引内股内股引大外刈小外刈内股
送襟絞引内股内股腰股引分先鋒
日本体操学校西橋大大神鈴宮宮木木山山山山大谷
田高楽楽島木木木木島島鼻鼻鼻鼻屋川

先鋒 笠笠有司 原原原田城 武治郎祐	成年組紅白勝負 紅	第四十九回秋季大会 十一月三日(金)	大將 藤赤川塚塚常男 豊	副將 赤羽鳥鳥 猶久興	守安 山岡谷田 三一郎
-----------------------------	--------------	-----------------------	--------------------	-------------------	-------------------

引分 裂姿固 先鋒 塩松尾日 山尾本下 保藍之 二輔	合技 合技 ○日 下桂 次	引分 大外返 大内返 引分 鈎込腰 小内刈 足払 体落	引分 副將 緒大藏杉庄白 方野本谷司居居 上居居上	引分 大外刈
--	---------------------------	--	---------------------------------------	-----------

副將

○永笠遠湯湯佐谷沢西櫛平平平小志荒山藤内内森峰
 野原藤池地藤沢井原崎林村木木木本井海海岡岸
 祐慶藤貞英正正弥重宗敏賢仙
 正太郎吾俊清夫典彦一郎太久傳勝一郎三

背負投大外刈引分大外刈縱四方引分払卷込大外返支釣込足引合縱四方絞技引腰縫技引股背負投内股引分大外返引分

○篠後安久○横○横○横○志日中中中山鈴○鈴高松猪○猪井
 原原藤東木田田田田田田比沢沢沢沢内木木木木村原原原
 恭政敬辰忠美信康慶泰恒
 敬行三吉実世行夫旦吉二郎吉二雄仁

三田対日吉紅白勝負

大将 佐藤永野
 佐藤祐夫

先鋒○成三田(紅)一

和○和○和○和○石筐大○池簾○松成○成
 田田田田間間渡川沢沢田原原岡宮宮
 德猶顯俊達豊恭一誠
 藏興一夫夫明敬郎一

足背負内大外刈引払引合送足大外返引合合引合内内
 払股股股股股股股股股

先鋒大将

○山下磯高由安滝横○横○樹井○田園○藤石日吉
 野崎川辺田井東沢田田田井上上中田田平渡(白)
 国晃勝直敬貞富士常光英
 高男平男人三彦実弥夫司康一二

鳥田島房藏正

○ 石山高 鈴山松永園下野川大坂
○ 木崎岡野田沢本
○ (照)一祐國達英
○ 高郎正康男夫男
○ 笹守和横川谷田井渡岡木俊一徳頭三忠
○ 夫郎藏肇一郎祐
○ 横田日山井田中比上常美豊実司術亘明

進級月次試合

十一月二十一日(火)

	三級の部				四級の部				甲組の部								
二級の部	1 ○ 山	4 ○ 円	3 森	2 峰	1 ○ 峰	6 ○ 北	5 北	4 奥	3 ○ 奥	2 小	1 北	1 塚	4 中	3 柴	2 神	1 武	
本	谷	岡	岸	岸		川	川	井	井	倉	川	本	田	田	永		
傳	和	賢	仙					英	律	保	英	太	宗	久	勝之輔	善之輔	
	夫	二	郎	三				一	二	雄	一	郎	寿	夫			
大内刈	払	腰	大外刈	合	大外刈		引	足	引	合	引	払	引	大外刈	引	引	
	腰	大外刈	技	合	大外刈		分	払	分	技	分	卷	分	大外刈	引	分	
田	三	円	○	○	塩		鳥	高	○	藤	奥	小	○	日	中	神	
辺	門	谷	岡	山			橋	川	原	井	倉		下	桂	本	田	
龍太郎	哲	和	賢				惠	正	英	律	保		次		太	久	勝之輔
	夫	夫	二	郎	豊		一	雄	一	健	二	雄			寿	夫	善之輔

余錄

柔道部報発刊 部報は大正七年廃刊以来、本年六月改良半紙に謄写板刷の第一巻（十三頁）を桑原 正幹事が編輯兼発行人として発刊、統いて翌十五年は皇紀二千六百年号として三月十八日発刊の第一号は六十四頁の活版刷となり、更に十六年二月二十八日発刊の第三号も六十頁の同じ体裁で、どうゆう訳か十二年卒の秋山正君が編輯発行人となつて、事局緊迫の折柄紙不足等のため惜くも第三号で発刊を中止した。